

イエスは4人の弟子を召すと、カファルナウムで汚れた霊に取りつかれている男をユダヤ教の会堂で癒す奇跡を行います。しかも、その行為を安息日に行ったのです。会堂ではユダヤ教の礼拝をしていますし、癒しの業とはいえ、安息日になんらかの行為を本来してはならないのです。その男に取りついた汚れた霊が自分に関わることを拒絶するのですが、イエスはその霊をその男から追い出してしまいます。ここでの主イエスは「権威ある者」（22節）として、「権威ある新しい教え」（27節）を語られたことが前面に出てきています。権威（エクス・シリア）という言葉は、言葉の印象からするならば何か強権的で自由を束縛する力を連想する向きもあると思いますが、このギリシア語はエクス（〜から外へ）という語と、ウーシア（あること、存在）とが組み合された語です。つまり、他人や力ある存在に縛られないで自由に行動できることを意味しています。あるいは、自分の内から外へ出ていく、という意味もあるので、イエスの人格からあふれ出たものに権威があるという解釈も成り立ちます。いずれにしても、この権威は権力とは関係がなく、逆に律法学者の権威とは対立的であることをこのテキストは示しています。

権力とは自分の都合の良いように、財力や武力によって力づくで他人を屈服させるものです。ただ、注意すべきことですが、主イエスの最初の悪霊払いの行動は、それを行った結果として周囲の人々がイエスに独特の権威があると判断したのではないことです。そうではなくて、イエスの語る「教え」に権威がすでにあつたのです（21〜22節）。安息日には会堂で公の祈祷と律法の書や預言書の朗読がなされました。ときとして朗読したヘブル語の聖書のテキストの意味が分からない場合は、それをギリシア語で説明されることもあつたのです。いずれにしてもマルコ福音書が強調していることは、イエスが「教えた」ことです。その内容については何も書かれていません。

ただ、律法学者とは違つた「権威ある者」として、権威ある「新しい教え」を説いたことだけがわかつたのです。そこでマルコ福音書全体から推測するわけですが、マルコ1章41節で『イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ……だれにも、何も話さないように気を付けなさい』と教え諭しています。また、6章34節では『イエスは……大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた』とあるように、イエスの教える行為がイエス自身の深い憐れみの心に起因していることを示しています。これに対してマタイ福音書は山上の説教の結びの部分（7章28〜29節）で、マルコ福音書と同じく、群衆はその教えが律法学者のようにではなく、権威ある者として教えられたことに非常に驚きます。ただ、その説教の中では『あなたがたも聞いているとおり、昔の人は……と命じられている。しかし、私は言っておく』（5章21〜22節など）というかたちで、イエスの権威ある教えの「内容」を具体的に紹介するのです。マルコ福音書がイエスの内面の思いに重点があるのとは対照的です。マタイ福音書ではイエスの権威が一般的に理解しやすいように内容重視になっているのです。

しかし、イエスが見出した神の支配の現実が差し迫っていることを、彼は「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」というメッセージで言い表しました。このことをもつと具体的に言うならば、これは神の国（天の国）という天国が近づいた¹ のではなくありません。神の国（王国）とは、ローマ皇帝が王座について世界を支配す

る世界が終わりを告げ、神が玉座について、神が公明正大に支配する世界の実現が近づいたという意味なのです。そこでは従来のローマ帝国が支配する社会の枠組みが壊されて、神の意志が前面に出てくる世界が実現するのです。だから、マルコ福音書は弟子の召命のあとに、その枠組みを破壊するように、汚れた霊に取りつかれた男を癒す記事が出現するのです。この悪霊払い、ローマ帝国の支配の下で異端者（たとえば精神の病に侵された者、身体に障がいをもつ者）は社会的な共同体から排除されたままでいいという枠組みを壊す象徴的な行いなのです。汚れた霊がイエスに対して『ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ』（24節）と拒絶の声を挙げますが、それは悪霊払いの行為がローマ帝国による支配を崩壊させる端緒となるからです。水の一滴から岩を砕く道がひらけるのです。ただ、一般民衆はローマ帝国の政治的・文化的支配によって根本的には排除されていても、自分たちが異端者を排除していると、その排除の構造が見えないのです。

しかし、イエスはこのタブーに挑みます。だから、権威ある者として深い憐れみの心を持ちながら、悪霊払いをし、多くの病人を癒すのです。社会は悪霊に憑かれた人や病気を排除しています。この人体の扱われ方で、社会でのその人の存在や関係性が明らかになるのです。つまり、悪霊に憑かれた人や病気の人たちを社会は排除するのですが、イエスがその人たちを癒すことは社会の枠組みへの挑戦となるのです。マルコ福音書ではその後も病人の癒し、重い皮膚病を患っている人の癒し、中風の人の癒し、手の萎えた人の癒しと、ずっと癒しの記事が続きます。そして、イエスは安息日に麦の穂を摘む律法違反も行ってしまう。そもそも本日のテキストも安息日違反でもあるのです。これらの行為をするイエスには、他人や力ある存在に縛られないで自由に行動できる権威がなければなりません。

イエスの権威はイエスの内から生じるものです。ですから、本日のテキストでの悪霊を追い出す奇跡も、イエスの権威を示すものとして紹介されています。悪霊を追い出すことはイエスの権威を具体的に視覚化するものです。悪霊に取りつかれている男が会堂の中で最初から出席していることはありえないので、礼拝のある段階で、その人が会堂に乱入してきたのでしょう。普段から礼拝に出席できないということは、宗教的社会的に人間の共同体からはじかれていくことです。しかし、そのような人が誰よりも先にイエスの深い憐れみに接し、具体的にイエスによる癒しの恩恵にあずかるのです。マルコ福音書では、この男を皮切りに幾人もの「汚れた霊に取りつかれた」男女が登場します。1章34節、3章11節、5章2節（ゲラサ人のいやし）、7章25節（シリアフェニキアの女の幼い娘）、9章25節（ものを言わせず、耳も聞こえさせない霊）と続きます。イエスは汚れた霊に対して権威をもって命じられると、汚れた霊もその言うことを聴く（1章27節）のです。その後もイエスは『悪霊にものを言うことをお許しにならなかった』（1章34節）し、『汚れた霊、この人から出ていけ』（5章8節）、『私の命令だ、この子から出ていけ。二度とこの子の中に入らな』（9章25節）と、イエスは次々と悪霊を排除していきます。しかし、悪霊の排除は、同時に神の支配の現実化であり、ローマ帝国の支配に風穴をあける行為でもあったのです。権威ある新しい教えとは、人を排除する社会システムの転換を促す行為でもあり、神の国の到来を人々に知らせる象徴的行為でもあったのです。